被災地を訪れて

千葉県隊友会白井支部

「むっ、なんだろうこの臭いは？」　車外に出た時の第一感でした。車が停車したところは、宮城県石巻漁港の近くの震災瓦礫がうず高く積み上げられた近くでした。かつて勤務した八戸駐屯地で、やませの吹く時に海の方から漂ってくる臭いを彷彿とさせる臭いでした。それは近くにある製紙工場からの臭いでした。そういえばこの集積場に到着する直前に日本製紙の石巻工場がありました。しかし、どうも変です。製紙工場は風下にあったのです。ペン画を趣味とし、幾度か被災地に入り各地の被災状況を描いてきている同行していた会員の亀川先輩が教えてくれました。「この臭いは被災地の臭いなんです。瓦礫が臭いの元なんでしょうが、震災直後に比べると随分匂いが収まったように思います」と。二年以上経過しても消えぬ臭気と集積場の周りに広がる荒涼とした光景は、訪問者に被災の大きさと凄惨さを認識させる十分なものでした。

【住宅地付近の瓦礫集積場】

県隊友会白井支部の１３名の有志は平成２５年５月２９日から３０日にかけて石巻地区及び空自松島基地が所在する東松島地区を訪れました。昨年の支部の総会時、会員の一人から被災地支援のために東北支援旅行の提案がありましたが、計画が遅れに遅れおよそ１年後の訪問となりました。計画の当初は松島基地の研修も合わせて考えておりました。残念ながら当日の松島基地の行事の関係で取りやめとなりました。翌３１日にはブルーインパルスが芦屋基地から帰還することになっていることを後で知りました。広報室に聞いたところでは、松島基地は格納庫等の重要施設のかさ上げ工事のため、基地内の道路はダンプカーが走り回り、砂ぼこりが舞い上がっているとのことでした。

石巻市においては、石巻観光協会の実施しているＪＲ石巻駅を起点・終点とする「石巻・

【海岸近くの工場に掲げてあった標識 ・ 玄関の上の青色標識の下部白横線まで浸水した】

【行き交うダンプカー】

震災まなび」説明コースを車で巡りました。石巻駅近傍の内陸部の市街地は震災や津波の痕跡なほとんど見受けることはなく、一見平穏でした。しかし、被災地の住民ならではの旅行者には知り得ないご苦労や悲しみがあるのだろうことを想い、車を走らせました。

海岸線に近づくと状況は一変します。工業地区の工場は操業しているようでしたが、道路にはひっきりなしに復興関連のダンプカーが走り回っていました。工業地区を過ぎると海岸に隣接する住宅地区となります。石巻市南浜町です。住宅地区の一角に前掲の瓦礫集積場がありました。住宅地の大部分の家屋は津波により大部分は倒壊し押し流され、倒壊を免れた家屋も取り壊されたらしく、更地になっていました。それでも、かつての宅地内の道路と敷地の境目の痕跡がなんとか確認できます。この住宅地区においても、多くの人々が特に体の不自由な人が逃げまどい、津波にのみ込まれ、命を失ったことは容易に想像できます。このような更地にもただ一軒だけですが、廃屋がさびしそうに佇立していたのが何とも物悲しく感じられました。地図を見ると近くに公園があるようになっているのですが、全く確認できません。ただ数本の枯れた切り株が残っているのみでした。

【取り壊されずに残っている廃屋】

南浜町の住宅地区を離れ、内陸に４００mほど離れた石巻市立門脇小学校の前に移動しました。海岸から小学校までは比較的幅広な地方道がほぼ直線的に走っておりました。この間、道の両側は住宅地であったのでしょう、今は更地になっています。門脇小学校は南側は今通ってきた住宅地になっていた平地と、北側は比高差７～８m程度の海岸段丘との接際部に位置していました。

【門脇小学校跡と隣接する墓地の惨状】

【小学校の南側の枯れ松】

前ページの写真は門脇小学校の校舎を南西側から取ったものです。手前に見えているのは隣接する墓地です。大部分の墓石は現在でも倒れたままです。お墓は土台を含めて津波により破壊されていました。

小学校の児童は幸いにも、また皮肉にも津波警報を受けて迎えにきた父兄とともに帰宅した児童を除き、学校に残った大多数は裏の高台に逃れて無事でした。前頁の写真で校舎の裏に木が映っています。木が生えているところが海岸段丘の台地上です。台地上は住宅地になっており、写真には映っていませんが校舎の左手には、台上の住宅地に続く舗装された小道の通学路があました。このため、津波の到達しなかった高台に比較的容易に避難でき、難を逃れたようです。同じ石巻の小学校である大川小学校の場合は、ニュースでもたびたび報道されているように高台への避難逡巡し、高台に向かう途中で大津波に巻き込まれ、児童も教職員も大多数が命を失うという悲劇に見舞われました。学校の近くに児童の足で登れる高台がなかったのも不運でした。門脇小学校の校舎は写真でもわかるとおり少し黒ずんでいました。これは津波が押し寄せてきたとき、我々も通ってきた海岸からの道路は避難車両で渋滞し、渋滞のまま津波にのみ込まれ、これらの車両がぶつかり合いながら校舎まで一気に運ばれ、ガソリンに引火し火災を起こしたためだそうです。このような被害を受けても、大多数の児童が助かったのは本当に幸運でした。

被災直後から現在に至るまで、被災者が色々な問題を抱えながらも、忍耐と理性と慎みをもって生活していることは、外国のメディアにも絶賛されています。国内外からの多くの義捐金が寄せられました。我々はその金額の多寡にすぐ目を奪われがちになります。インド洋に浮かぶ島嶼国モルディブは人口３０万の小国です。決して豊かな国ではありません。このモルディブから人口に倍する６０万個以上のツナ缶が被災地に無償で贈られました。多分モルディブでは、ツナ缶１個で数名の家族の１食分のおかずとなっているような国情だと思います。何とも心温まる支援ではないでしょうか。

私どもの被災地を巡る旅は、実質１日足らずでした。そのため、我々の観察も皮相的なものに終始した感は否めません。被災地支援の一助のためにと銘打って、被災地を訪れました。モルディブの人々の心意気には到底及びませんが、ほんのささやかでも被災地の方々への支援になったならば幸甚に思います。

被災地の惨状を目の当たりにして、改めて大震災で命を落とした方々と今なお行方不明になっている方々のご冥福と、１日も早い被災地の復興をお祈り申し上げます。

（文責　増山）

【帰路に立ち寄った松島にて　最高齢は83歳でした】